Photographic Society of
Zone System

ゾーンシステム研究会　会報　（Web 公開版）
発行日：2005.11
発行者：中島秀雄
事務局：畑文夫
編集部：荒井崇

NO.32

CONTENTS

- アダムスの暗室検証
- ジョン・セクストンの言葉
- カーメルの魅力
- ポイント・ロボス報告
- 14×17 自作イーゼルの製作
- 倉持悟郎氏講演会　ﾌﾗﾝｽを中心としたﾖｰﾛｯﾊﾟ写真界とｵﾘｼﾞﾅﾙﾌﾟﾘﾝﾄ
- ゾーンシステム研究会定例会日誌
- インフォメーション

アンセル・アダムス生前のリビングルームにて
アダムスの子息マイケル・アダムスと研究会員。
（カリフォルニア州　カーメル、6/18/’05）

アダムスの暗室検証
（アンセル･アダムスツアーにて）

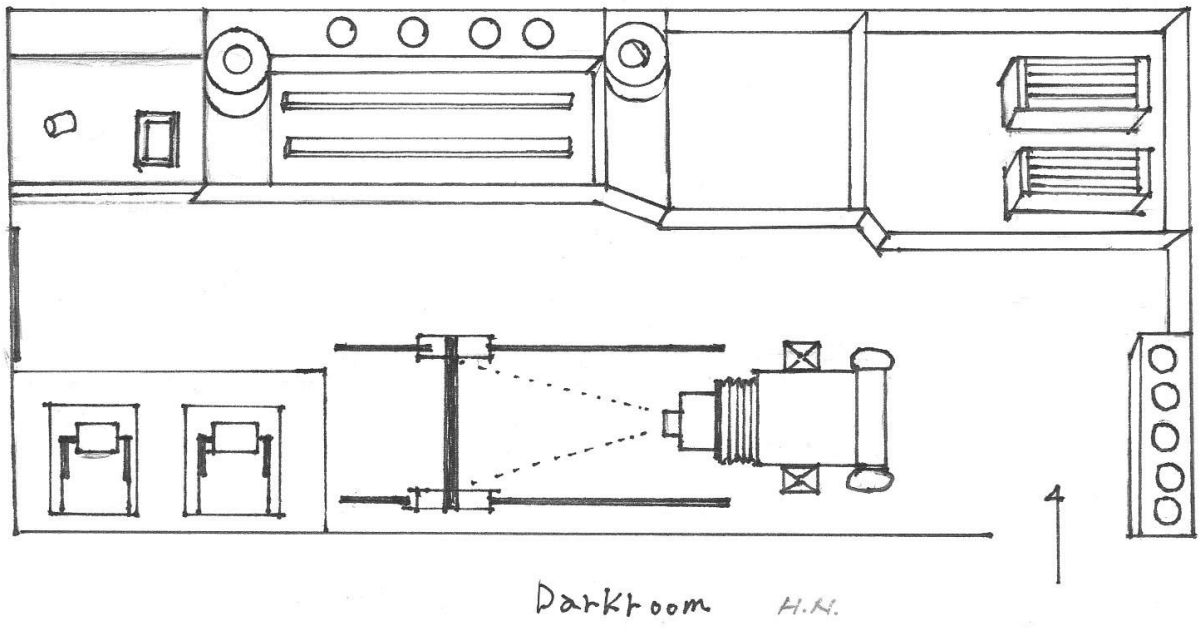
中島秀雄

アシスタント時代の暗室といえば、小さな台所のある3畳ほどのスペースの中に引伸し機とシンクがあった。湯を沸かすときはとりあえずカーテンを閉め、蒸気の充満する中で仕事をしたこともある。小さな暗室から偉大な作品が生まれる、と私の先生はよく言っていた。

アダムスの暗室に強い興味を持ったのは家を新築することが決まったときだった。当時、アダムスの書いた技術書 ”ザ･プリント” はすでに手元にあり、暗室設計のページに目を凝らし眺めていた。十分なスペースと設備のすばらしさに、今までの暗室のイメージがすっかり変わったのを覚えている。そのときから暗室設計に関する資料を米国より取り寄せ、研究してみることになった。資料には材木の組み方、防水、水道のパイプ回し、電気配線と大工顔負けの設計図のほか、ガレージ、屋根裏部屋、台所、階段下の空きスペース、そして、トイレを改良した様々な暗室例が写真とイラストで見ることができた。しかし、どの例を眺めてもアダムスの暗室に勝るものはなく、アダムスの暗室は本の写真を見るだけでもすばらしいという印象をもっていた。

アダムスの暗室は、玄関ホールからワークルームに入ったすぐ右に入り口があった。
入るとすぐ右には薬品棚、その先は最終水洗の第3シンクになり、そこから左奥に第2シンク、第1シンクとつながっている。そして、さらにその奥にはフィルムの装填、レンズの収納、印画紙収納といった準備デスクになっている。反対側のドライサイドには 8x10 の引伸機、レールに乗った移動式印画紙固定パネル、その奥に 4x5 引き伸ばし機 2 台分のスペースとなっている。一番奥は、非常用パニックドアーになっていて、暗室全体の大きさは、幅 4m、奥行きは 9m くらいだろうか、日本だと二部屋分は有にあると感じた。

図参照
天井は打ち抜かれ、その分天井は高く、等間隔に並んだ分厚い 5 枚の梁が片方に傾斜し、荒削りな構造と贅沢に部材を使った堅牢な設計に米国の住空間の特徴を感じた。床はコンクリートが全面



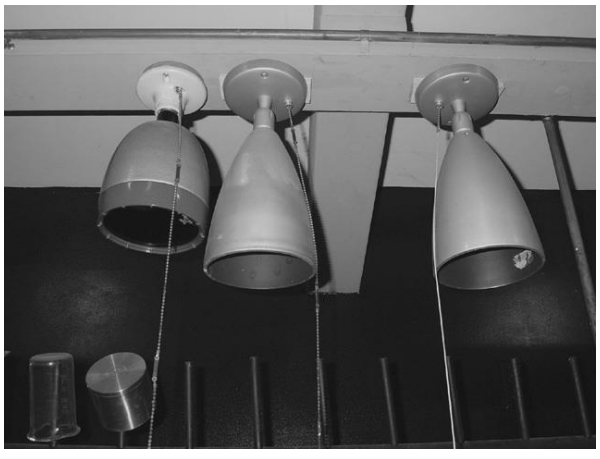
に打たれ、シンクに沿ってゴムマットが床に敷かれていた。

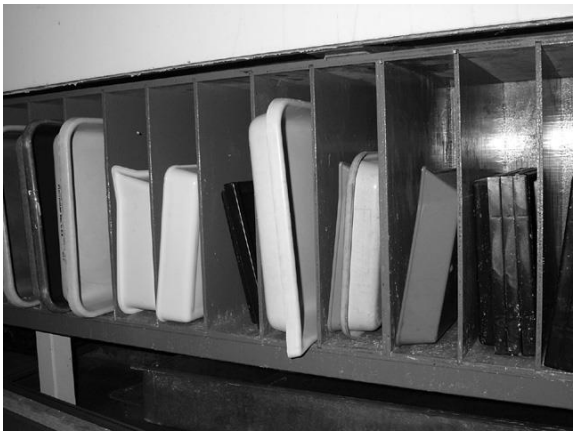
アダムスの暗室の特徴は何と言っても十分な設備、余裕のあるスペース、そして、三つのシンクと特製の 8×10 用引伸し機と言えるだろう。

第一シンクは、現像、停止、定着の全紙バットが横位置に三つ並べることができる比較的細長い形になっている。アダムスはシンクの中でバットが回転できる幅が必要だといっていることから、70cm はあるだろう。シンクのトップまでの高さは私のひじの高さまであり、アダムスの背の高さは確か 6ft.(180cm)といっていたから、床からひじまでの高さはおよそ 3.6ft.(110cm)となり、腰を曲げることなく作業できる高さになっている。私のシンクは 90cm の高さしかなく、改良が必要だと以前から思っている。シンクの向かいの棚にはビーカー、溶解済みの薬品が入ったビン、温度計、タイマーが効率よく並び、黒に塗られた壁が引伸機からの光の反射を防ぐようになっている。そして、シンクからおよそ 70cm の高さに水道の蛇口が設置されている。シンクは薬品の溶解、バットの洗浄、手洗いのために水道の蛇口がどうしても必要である。しかし、移動するバットが蛇口に当たったり、印画紙がふれて折れ曲がったりと作業の邪魔になることがある。上部に取り付ければ邪魔にならず、これは長年の経験から出てきたアイディアに違いない。私も早く改装したいと思っているが、上部に水道配管を回すとなるとちょっとした工事になり、まだそのままになっている。しかし、ぬれた手で上部の蛇口にさわると袖口から水が入り、悩ましくもあると感じてしまった。シンクの側面は白、シンク自体はグレーの塩ビのように見えた。ひじが当たるトップ回りはステンレス板で化粧されて、見た目にもクリーンな作りになっている。シンクの底にはステンレスの角材が 2 本横に並び、その上にバットを置くようになっている。液温管理まで見ることはできなかったが、シンクに栓をして適温の湯をためることで冬場のコントロールは可能だと想像した。シンクの下は収納スペースになっていて、様々なサイズのトレイが収納されていた。

第二シンクは全体が白で塗装されて明るく、奥行きもあり、第一シンクより 20cm ほど手前に張り出している。ここは予備水洗、あるいは第一水洗や調色としての用途に有効で、最終水洗を待つプリント貯蔵スペースとしても十分な広さになっている。第一シンクと第二シンクの境目には幅 50cm ほどの天板になっていて、プリント・ビュイングパネルを立てかけられるようになっている。

第三シンクには全紙プリント用の水洗器が 2 台並んでいた。広さはロールプリントが十分水洗で





きる大きさになっていて、幅 2m 奥行き 1.2m ほどの大きさで、したがって第二シンクよりさらに手前に張り出している。つまり、基本的に一人で作業する第一シンクから、数人で水洗、調色処理ができるように、第二、第三シンクと順次広げられ、作業効率を十分考えた設計になっている何とも豪華なシンクなのだ。そして、それぞれのシンクの上には蛇口が取り付けられ、当然セーフライト、ビュイングライトがシンクごとに設置され、それぞれのスイッチ用コードが下がっている。シンクだけでこれだけのスペースを持つ写真家は日本に何人いるのだろうか。見ているだけで大きなプリントを作ってみたいという気持ちになってくる。

ドライサイドの圧巻は何と言っても **8x10 用特製引伸機**だろう。この引伸機は大型の木製カメラを改良したもので、かつてどこの町の写真スタジオにもあった。カメラ本体は二本の支柱に支えられ、足元にはキャスターの付いた装飾的な鋳物によって固定され、いつもスタジオの中央に鎮座していた。その名前はアンソニー(アンセルではない)と呼ばれたカメラだ。

次号に続く・・・・

ジョン・セクストンの言葉
（アンセル・アダムスツアーにて）

畑文夫

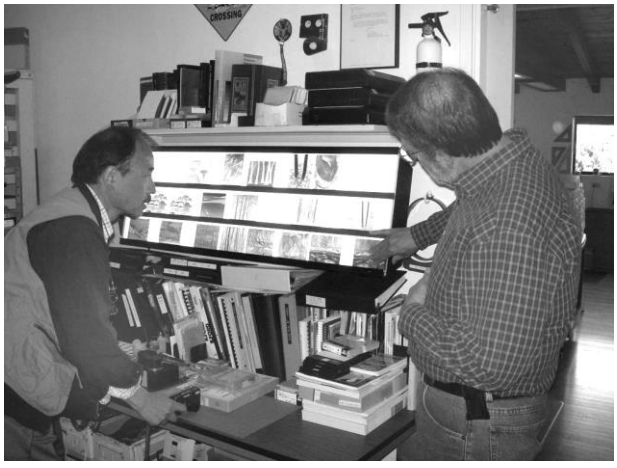
今回のツアーではアンセル・アダムス最晩年の助手であったジョン・セクストンの話を二日間にわたって聞くことが出来た。

６月１７日はカーメル・バレーのジョン・セクストンスタジオを訪問し、セクストン自身のテクニックやアダムスのプリントに関する解説を聞き、翌１８日はアンセル・アダムスの暗室をセクストンの案内で見学することが出来た。ここでは、両日の話をまとめて書くことにするが、断片的で読みにくいところはご容赦願いたい。

１７日は前日に続き、朝６時ごろからパシフィック・グローブの海岸で撮影、８時ごろにキャナリー・ロウにあるスターバックスで朝食をとる。観光地で世界共通の店に入ると何となくほっとするが、サンドイッチの巨大さ、パンの硬さにはいささか閉口した。

９時からポイント・ロボスに入り、今度はウェストン・ビーチを撮影する。

昼すぎ、岩場を歩いていたＭさんが転んで膝を切るというアクシデントが発生。傷がかなり深いので、吉田さん、北野さんが付き添って病院に行くことにする。心配ではあったが、残りのメンバーでセクストンのスタジオに向かう。



３時少し前に到着。セクストンの暗室を見学。ネガの補力に関する説明や、アダムスのネガの複製などを見せてもらう。

セクストンの引伸し機はすべてLPL製で光源は多階調用モジュール。レンズは EL ニッコール。余談だが橘田さんは帰国後、さっそく同じモジュールを購入したという。

全員がそろったのは５時過ぎ。吉田さんの通訳でセクストン自身とアダムスのプリントの解説になり、結局は７時ごろまで話を聞く。思いがけず長時間のミニ・ワークショップとなった。殆どのメンバーが写真集を購入し、お揃いの帽子をおまけにもらう。

８時、近くの和食レストラン・ろばたで夕食。ここはかつてアダムスも好んで立ち寄ったということだ。

１８日　午前中はカーメル市内でウェストン・ギャラリーなどを見学。カーメル・ハイランドのハイランド・インで昼食後、ロビーにあるアンセル・アダムスギャラリーでハンティントン・ウィダリル展を観る。

夕刻よりアダムス邸に多くの写真家と集まり、彼らの作品を見せてもらったあと、８時ごろからセクストンによるアダムス暗室の説明を聞いた。

＊＊＊

● ″Monolith, The Face of Half Dome, Yosemite National Park″ の解説：

アンセル・アダムスが初めてビジュアライズ、即ちプリントでどのように表現したいか、気がついたハーフドームの写真。

1927 年 4 月、アダムスが未だ 25 歳のとき、雪で登るのが大変難しい場所で 6 1/2 × 8 1/2 ガラス乾板ホルダーが 1 枚（乾板 2 枚）だけ残っていた。1 枚をイエローフィルターで撮影した後、ハーフドームの表現には空が明るいグレーでは良くないと気づき、赤フィルターに替えて撮影した。

写真史家たちによれば、これがアダムスの転機となった最も重要な写真である。

● フレッド･アーチャーについて：

アーチャーは 40 年代の有名な肖像写真家で、Fred Archer on Portraiture という本を書いている。　（絶版で古本屋でしか手に入らないが、それほど高価ではない）

Art Center School （現在の Art Center College of Design, Pasadena）で 1938～40 年ごろアダムスと一緒に写真を教えていて、彼らがゾーンシステムを定式化した。殆どの生徒は GI で、彼らの再教育であったが、創造的な技術を教えるのにとても苦労していた。

● 自分の愛するものを撮りなさい。そうすれば写真を愛することが出来る。

● ペブル・ビーチ（有名なリゾート地ではなく、サンタ・クルスの北）では、ウィン･バロックやブレット・ウエストンも好んで写真を撮った。

● #12 フィルター（黄色）は良く使う。アダムスも好んだ。

● バックティルトによって被写体を変形･強調させるのは重要なテクニックだ。

● 引き蓋を太陽に向かって引いてはならない。フィルムホルダーをカメラに差し込む向きを変えること。三脚によっては下に引くことが難しいが。

● 写真家によっては撮影で創作行為が終わってしまう人もあるが、私はアダムスと同様に暗室まで創作が続く。

● 私がアダムスから学んだことの一つは、暗室での途方もない創造性だ。

● フィルム、印画紙、現像液などは自分で何千枚も使い、実践を通じて特長をよく知ることが必要だ。

● 相反則不軌の補正データはテストの結果をチャートにしている。T-MAX100 や Acros は影響が少ない。たとえば、露出計で 1 分の露出が必要な場合は実際に 2 分となる。一方、Tri-X では 4～5 分

にする必要がある。長時間露光では感度が逆転する。

● フィルム現像について：

フィルム現像は JOBO エキスパートドラムを使っている。これば現像ムラが殆ど出ない。フィルム 6 枚につき 600cc の現像液を使い捨てる。皿現像はめったにしない。

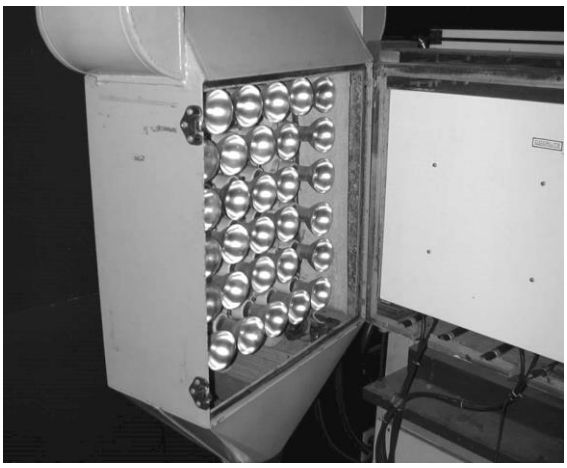
● 常用フィルムは T-MAX100。常用現像液は T-MAX RS DEVELOPER 又は X-TOL だ。

T-MAX RS DEVELOPER は通常希釈が 1:4 だが、1:9 で使う。こうすればマイナス現像（セクストンは「マイナス・ゲンゾウ」と言う！）でも時間が短くなりすぎない。

● ネガの補力：

私はゴミやキズによる失敗を防止するため、同じ露出で２枚撮影する。そして一枚のネガはコダックセレニウムトナーで補力することがある。

セレニウムトナーとハイポクリアリングエージェント（使用液）１：１の混合液で５分、ネガの一部または全部のコントラストを上げることができる。補力によるネガ濃度の上昇は、元の画像の濃度に比例する。従って、銀画像の無い部分には効果が無い。粒子が荒れることが無く、高品位な補力になる。この手順は自分がアダムスの助手であった 25 年前にアダムス､アラン･ロス(Alan Ross)、そして自分たちで発見した。



● プリント現像液はアダムスと同じくデクトール（１：２希釈）を３０年以上使い続けている。号数紙を使う場合、セレクトールソフトを別のバットに入れて併用することがある。両者を混ぜることはない。

● アダムスの引伸し機について；

8×10 引伸し機は、昔はポートレート撮影用にどのスタジオにもあった 11×14 カメラを改造したものだ。(1962 年) 5×7 用に 450 ㎜、8×10 用に 600 ㎜の APO ニッコールレンズを使用した。

光源は 36 個の電球を個別に点滅できる。冷却用のファンから振動が伝わらないように長いホースでつながっている。

’76 年以降、コールドライトに変更した。　ネガを熱から守るためと、コールドライトが 2 絞り半明るいからである。電球では露光時間が分単位だったが、5～6 倍早く、秒単位になった。

・引伸し機のアライメントはとても重要である。どんなに良いレンズを使ってもアライメントが狂っていてはシャープにならない。この引伸し機はテストネガを投影してチェックする。

● アダムスの晩年(’79 年ころから死去するまで)には良い VC ペーパーが無く、号数ペーパー（オリエンタル・ニューシーガルとイルフォード・ギ

ャラリーの二種類）を使っていた。

’50～’60年代には良いVCペーパーがあったが、’70～’80年代には無かった。今日では良い品質のVCペーパーが手に入る。

● アダムスは引伸しタイマーを使わず、メトロノームで露光時間を測った。

● アダムスはピンセットを使わず、素手で印画紙を扱った。印画紙の裏表を入れ替えるようによく攪拌するためには、ピンセットを使うと印画紙にキズや折り目をつけやすい。

● アダムスはプリントに2～4日かけた。翌日、乾燥したプリントを見ながらどのように仕上げるかを考えた。

● アダムスは「ネガは楽譜、プリントは演奏」とよく言っていたが、彼こそは巨匠（ヴィルトゥオーソ）だった。

カーメルの魅力
（アンセル･アダムスツアーにて）

松本ひさ子

時が経っても鮮明に残る町並み。あの時の空気の臭いが心地よく、いつかロングスティをしてみたいと思った。

６月１８日（土）早朝、カーメルミッション（教会）の辺りで私達、旅行参加者は思い思いの場所に三脚を立てていた。門は閉まっていたが近づいて覗くと凛とした奥の建物や、宿舎のような石造りの建物、斜光の朝陽を受けて静かに佇んでいる中庭が見えた。私は回廊の刻々と動く影の表情に惹かれていた。長い年月変わらぬ建物と一瞬たりとて同じ顔をしていない壁が確かに共存している。何人が触れた手すりなのだろうか？何人が開けた扉なのか？何人がもたれた壁なのか？どんな思いで歩いた回廊なのだろうか？と思いを馳せた。

朝食は車で少し上って商店街の角地、オムレツがメインのカフェレストランに席を作ってもらった。地元の家族連れで賑わっている明るい店内で美味しいひとときを過ごした。カーメルはアメリカでも指折りのリゾート地で、緑となだらかな起伏に富み、品の良いおしゃれな町だった。まずは待望のウェストンギャラリーに向かった。こんなに近づいて見てもいいのかと思うほどの距離で作品が鑑賞できる。売約済みの赤ピンも貼られていた。奥のコーナーではマイケル・ケンナの北海道展が日本の説明パネルと共に展示されていた。ゆっくり見入っていたがその後は各自別行動で時間集合になった。消防署を目印に時間の許す限り散策を楽しんだ。フォトグラフィー・ウェスト・グラフィックギャラリーものぞいてみた。間口は狭いが奥行きはかなりある。ここは町並みがギャラリーのようで違和感なく点在している。ブラッと入って気に入れば買い求めるのが日常なのだろう。しつこく勧められることはなく絵画も写真も少しも構えがない。土曜日の昼下がりを家族で過ごす優しい時間が似合う町だった。横断は人が優先、信号よりも渡っている人に譲るルールが浸透している。

カラリとした強い朝陽にアロエの作る影が強烈でした。カーメルミッションの脇で。

メーターの配置も町の雰囲気を壊さぬようにユニークなセンスを感じます。

お昼はカーメルハイランドのアダムスギャラリーに行く予定があり、名残惜しい町を後にした。

今回の研修旅行は私にとって内容の濃い贅沢の極みでした。不覚にも怪我をしてしまい、ご迷惑とご心配をおかけした事、心よりお詫び申し上げます。モントリーの総合病院も貴重な体験として忘れられない思い出になりつつあります。

ポイント・ロボス報告
（アンセル・アダムスツアーにて）

北野龍一

６月１６日９時過ぎ、カーメルから１号線を南に４マイル、ポイント・ロボスに入る。

街道筋からうっかりしていると見落しそうなアプローチ。乗ったまま入り口で入場料を払って入る。２号車には６２歳以上のシニアが２人いるので、入場料は若干割り引きされて、５人で６ドル。先行する１号車の後をついて行くだけなので、余計な心配をすることも気配りをすることもない。

広大なポイントロボスの何処へ向かうかも２号車には分からない。もう少し事前の打ち合わせをして、どういうところへ行くのか、何を撮るのか、心の準備をしておけばよかったとちょっぴり反省する。

林の中のカーブした道を抜けて海岸に出る。そこは小さな入り江になっていて、これまで見て来た大平洋と言う感覚とはちょっと違う。伊勢湾辺りの小さな入り江といった感じ。海は海草が繁茂しているようで、あまり透明感はない。それでも何人かのダイバーの姿を見かける。ポイント・ロボスでは数少ないダイビングポイントらしい。駐車場に車を置いて、カメラ機材を担いで緩やかな斜面を登る。

やがて、”Whalers Cabin Museum"　と書かれた看板のある古い小屋の前に出る。どうやら看板は鯨の骨の破片に書かれている。漁師のことを'fisher'と言うのだから、鯨取りのことを'whaler'と言うのは当たり前かと、妙に感心する。巨大なcypress の樹に押しつぶされそうにして建っているこの掘建て小屋は、中国人の鯨漁師の小屋で、１８５０年代に建てられたとのこと。かつて日本人の鮑漁師もここにいたことがあると言う。鯨取りが whaler なら、鮑取りは abaloner かなあとバカなことを考える。

中島先生は、既にイメージが出来上がっていたようで、正面に三脚をたて撮影体制に。邪魔をしないように、同じ場所は避けて裏手に回ってみる。

ここはかつて鉱物の積み出し港としても使われていたらしく、鋼鉄製のローディングマシーンの残骸等があり、造形として一寸興味を引かれるが、コントラストに乏しい。その他鯨の骨の白い破片が散乱していたりする。巨大な cypress からの木漏れ日が柔らかな光を生んで、古びた小屋に優しく当っていて、何とかこれを絵にしたいと考える。陽に当った樹の幹をゾーン?に置くと板葺きの屋根の光った部分はゾーン?に、小屋の壁はゾーン?にくる。やや逆光になるから空が飛び気味になってしまうのはやむなしとするか。等と考えながらシャッターを切る。stop f45, speed 1/4。ポイント・ロボスでの撮影第１号。時計は１１時をさしている。

午後は、一転して荒々しい岬に向かう。大平洋から吹き付ける激しい風で樹全体が曲がり、独特の景観を生む。我々が到着した時も、岩場の上は激しい風が吹き、カメラも三脚も激しく揺れる。おまけに寒い。樹・岩・海、撮りたいものが次から次に現われる。起伏のある広大な回遊路を移動しながら集合時間を気にしつつ、大急ぎで撮影を続ける。

集合時間、駐車場に戻る。２号車の横につばの広い帽子を被り、映画で見る州兵のような制服を着た背の高い公園の警備員（といってもちゃんと

ピストルを持っていて、警察権があるらしい）が待っていた。お前はさっき小屋の前で写真を撮っていたかと聞いて来た。何か規則違反をしたのかなあとどぎまぎしながら、そうだと答えると、あそこにいる女性がこの車に彼女の車をぶつけたとのこと。就いては、調書を作成するからこの車のレンタル契約書を見せろと言う。車を捜しまわるがなかなか見つからない。そのうち当事者の女性がやって来て、「もう一時間以上もここでお前の帰りを待っていて、まだ何処も見ていないので、今から子供をつれて見に行きたいがいいか」と聞いて来た。そんな無責任なと思ったが警備員も彼女の車の番号、車体の番号、保険の番号、住所、電話番号は既に聞いていて、調査書が書けるのでOK だと言う。

ゾーンの連中は誰も帰ってこず、右往左往しているところへ吉田さんが戻って来てくれて、ホッ。その場で警備員は事故調査書のリファーナンバーを教えてくれて、レンタカー会社にその番号を言えば保険求償ができると言う仕組みらしい。さすが車社会と妙に感心、納得。とんだハプニングだったが、面白い経験をした。

ポイント・ロボスには、翌日も行った。ここはこれまで多くの写真家達が取り組んだように、いくら撮ってもあきない場所だと思う。公園として快適に過ごせる最低限のインフラと、きめ細かく残された自然とが旨くバランスしている。余程危険な場所は形ばかりのロープが張られて立ち入り制限しているが、殆どの場所でフェンスらしいフェンスはない。触れると危険な poison oak と呼ばれる毒草も我が物顔に繁茂している。自己管理責任と自然及び景観保護とのバランスが考えられているのだろう。

澄んだ空気とカリフォルニアの太陽光が、一層景色を引き立てる。何処を切り取っても写真になるように思えるのは、単に物珍しいからだけでは無さそうだ。こういう環境の中で写真が発展したのはむべなるかなと思えてくる。

ポイント・ロボスは２日に亘る撮影でしたが、象のシッポに触ったに過ぎない。樹も草も岩も海も、まだまだ感じてみたい。もっともっと歩いてみたい。何時かもう一度戻ってこようと考えながら、ポイント・ロボスを後にした。

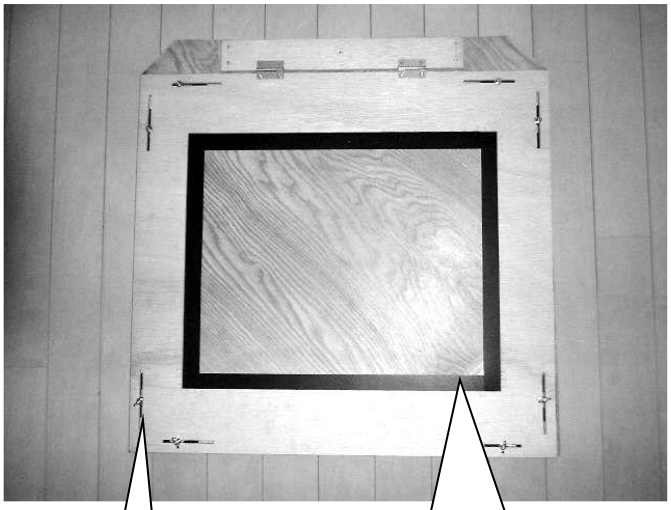
14×17 自作イーゼルの製作

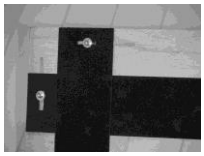
佐野司郎

本年 11 月、12 月の写真展は今までの大きさ１１×１４より大きい１４×１７で出品することになりましが、私はこの大きさのイーゼルを持っていない為製作することにしました。
印画紙を覆う羽はある程度の可動性（スライド）を持たせ、プリントし易いようにしています。
以下に寸法を紹介いたします。皆様の参考になれば幸いと思います。

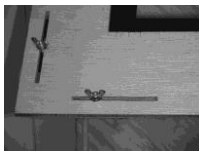
【完成写真】

●真上より



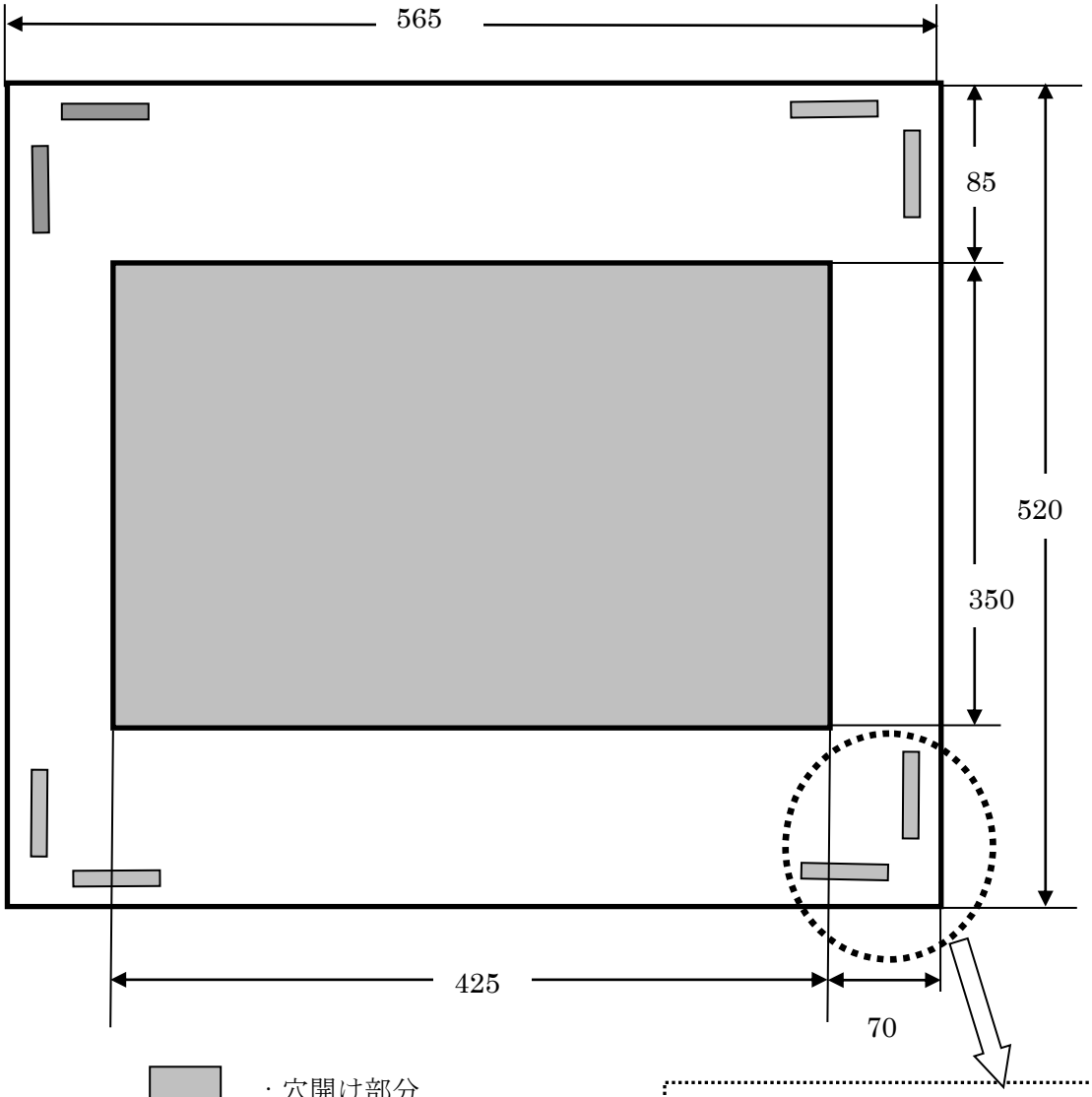


蝶ナット部

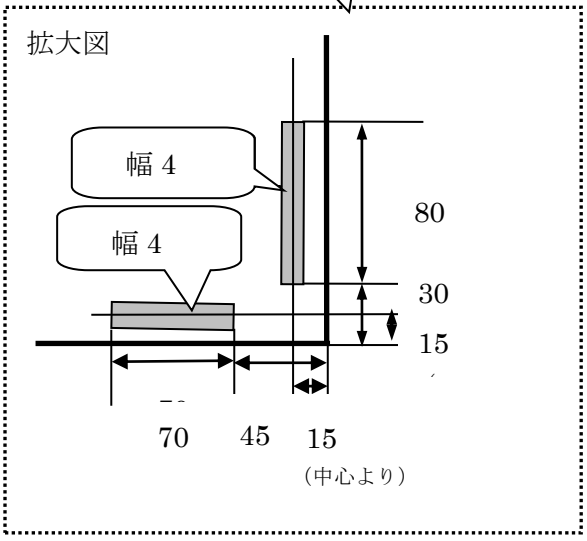


●斜め前方上部より（少し開いています）
・閉じないようにツッカイ棒で開いています。
・台にある白いものは印画紙を固定する紙です。

【寸法図】



：穴開け部分



・本体材質：合板（厚み 6mm）
・羽の材質: プラスチック製(軟質)
　色は黒(不透明) (厚み 0.3mm)
・羽を稼動させたとの直角は定規等で確認します。
・合板に映像を投影するときは、プリントと同等の印画紙を裏返しに置いて確認します。
・羽にて大きさは自由に変えられる為、印画紙メーカにとらわれず微調整可能です。
・加工は東急ハンズでお願いしました。
　製作費用は加工料込みで約 4000 円ほどでした。

倉持悟郎氏講演会

ﾌﾗﾝｽを中心としたﾖｰﾛｯﾊﾟ写真界とｵﾘｼﾞﾅﾙﾌﾟﾘﾝﾄ

荒井崇

日時：２００５年2月２０日（日）１５～１７時
会場：フォーラムよこはま　セミナールーム１

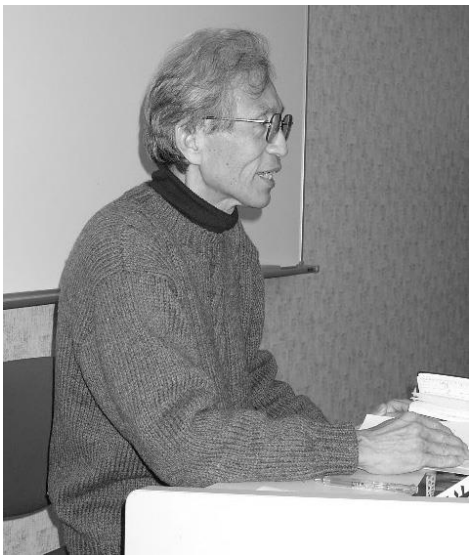
2005 年研究会総会後、恒例の講演会が行われた。今年は GIP 代表の倉持悟郎氏をお招きし、講演していただいた。

倉持さんは、慶応大学経済学部出身で、もともと学生時代、写真に興味があったわけではなかった。ジャーナリズムに進みたいと考え、写真通信社（オリオンプレス）へ就職したという。ここで写真をディストリビュート（配信）するフォトエージェントとしての仕事を続け、後に独立して現在の（株）ジー・アイ・ピーを設立することになる。

今回の講演では、フランスの写真界のみならず、これまで経験された多くの写真家にまつわるエピソードを紹介していただいた。

まずフランスの写真界についてであるが、写真界にはいくつかのグループが生まれた。
最も有名なのが MAGUNUM であり、1947 年に設立された。MAGUNUM とは PHOTO AGENCY であり、写真家と組織が半分ずつ資金を出し合って運営されたものである。その運営は、以下３つのやり方で写真の依頼を受けるという。

１．ASSIGNMENT : MAGUNUM 所属写真家に頼んで写真を撮ってもらう。
２．CONSIGNMENT : 既にある MAGUNUM 所属写真家の写真を提供する。
２．STRINGER : 現地在住の MAGUNUM 所属写真家に頼んで写真を撮ってもらう。



また、フランスには RAPHO と呼ばれるグループがあった。ヒューマニズム写真家のグループで、私たちも良く知る、ROBERT DOISNEAU、IZIS、WILLY RONIS の３人である。

更に 1968 年前後の時代、フランスでも学生運動が始まった。この頃も写真界では、GAMMA、SYGNA、SIPA、CONTACT という４つのグループが誕生したそうである。私たちにはあまりなじみのないグループであり、今回は時間が無かったので特に説明は無かったが、興味のある方は調べてみると良いかもしれない。

次に、倉持さんがオリオンプレスに居た時代のエピソード話があったので紹介したい。
1963年11月23日、ダラスでケネディが暗殺された日である。夜中、倉持さんは同僚に起こされ、同僚のバイクの後ろに乗って会社へ向かった。数人で深酒して寝ていたところだったので、かなりきつかったらしい。会社で至急ケネディの写真（４５cm角くらい）を探し、写真を風呂敷に包んで朝日新聞社へ持って行ったという。

このときの写真はカメラプレス（CMP）というイギリスの通信社であった。この通信社は当時、

YOUSUF KARSHというポートレートで有名な写真家を抱えており、上記ケネディの写真もKARSHの撮影したものだったという。ちなみにKARSHは当時、OTAWAに住んでいたため、俗にKARSH OF OTAWAと呼ばれていたそうである。

また、カメラプレス（CMP）からの写真は、全てバライタ紙で送られて来た。当時既に他の会社はRCペーパに切り替えていた時代である。「恐らくその写真の価値が高いものだとアピールしたかったのではないか。」と倉持さんは言う。「オリオンプレスを辞めるとき、これらを黙って持ってきたらよかったね。」と言って笑っておられた。

ケネディの暗殺後、カメラプレス（CMP）から今度は時期大統領ジョンソンの写真が送られて来た。今回もKARSH撮影の写真である。倉持さんはその価格を見て驚愕した。何と１８０万円。それでも倉持さんはまず朝日グラフ編集長にこの写真を持って行く。編集長はその価格を知らされて即断ると思われたが、「会議に乗せるから食事でもしていてくれ。」と一応土俵に乗せてはくれたがやはりNG。当時は、編集室へ行くと大変もてなしてくれたという。今回のように食事を出してくれたり、慰安旅行に誘ってくれたりしたこともあった。今では会社の締め付けが厳しく、こんなことはとても考えられない。1960年代高度成長期の話はこんな話が良く出てくるが、世の中良くなったのか悪くなったのかよくわからないことがある。

その後、文芸春秋へ持っていったところ何とか１８万円なら９ページ載せてくれるということになった。しかしながらカメラプレス（CMP）希望価格との差は何と１０倍。それでもとりあえずカメラプレス（CMP）へ打診したところ意外な返事が返ってきた。

「Disappointed but accept.」（残念ではあるがOKです。）と。

次に、この講演の中で話しをしていただいた、２人の著名な写真家の撮影エピソードを紹介する。

１人は先ほどカメラプレス（CMP）の話の中で登場したYOUSUF KARSH。イギリスの首相チャーチルを撮影したときのエピソードである。チャーチルは大の写真嫌い。そこでKARSHは撮影終了直後、ある奇策を実行したそうである。チャーチルの葉巻をいきなり取りあげたのである。そしてカメラに向かってにらんだ表情に合わせてシャッターを切った。かの有名なポートレートはこうして完成されたそうである。

もう１人はP.H.HALSMAN。ライフの表紙を101回撮影した偉大な写真家であり、倉持さんとも親交のあった写真家である。有名人をジャンプさせて撮影したポートレートが最もよく知られている写真家だ。

彼の写真にもチャーチルが登場する。HALSMANはチャーチルを撮影するため何度も通い続けるがなかなかうまく撮らせてもらえない。ところがある日、石の上にチャーチルが座って背中を向けていた。HALSMANはこれだと思い、

後ろ姿のままチャーチルを撮影。通常ではありえないポートレートであるが、これが大好評となった。

また、トランペット奏者のルイ・アームストロングを撮影したときのエピソードはまたユニークであった。ライフの表紙は常に縦位置でなくてはならない。しかしながらトランペット奏者は横向きでないと構図にならない。そこで彼は、何と脚立を用意し、演奏中のルイ・アームストロングを上から狙った。見事に縦位置で決まる構図が完成。これも有名な写真になったそうである。

以上、倉持さんの話は、非常に興味深い話が豊富で尽きることなく、とてもこの時間内で話しきれるものではない。また、ぜひ機会を作って続きを聞きたいものである。

なお、昨年大病を患い未だ完全に体調が戻らない状況にもかかわらず、このようなすばらしい講演をしていただいたことに、私たち一同多大なる感謝を送りたい。

倉持悟郎氏　略歴

・1939年　東京生まれ。　　早稲田大学卒業。

・1982年　（株）ジー・アイ・ピー設立。代表取締役に就任。　翌年パリに事務所開設。

主として海外の写真家を紹介する写真展やシンポジウムを開催すると同時に日本の写真家を海外へ紹介。

・パリ写真月間における「日本広告写真」展など。

・国内では「ザ・ファミリー・オブ・マン」、「国境なき医師団」、「ピターイヤーズ」、「ヘルムート・ニュトン」、「セシル・ビートン」、「I Love Paris」、「ハリウッド映画」展、「にっぽんー大使たちの視線」など100展以上企画してきた。

・1998年には、世界人権宣言50周年記念の「ヒューマンライツ」展“Keep the light on Human Rights“を企画。

・写真展のカタログも多数出版する。

・写真シンポジウム「現代ヨーロッパ写真講座」など多数開催。

・ケルンフォトキナ特別賞、アルル国際写真フェスティバル・アルル市功労賞、オランダ世界報道写真展国際審査委員にも選ばれている。

・2002 年、ルクセンブルグ大公国よりオフィシエ章を受賞。

・名護市写真まつり　コーディネーター

ｿﾞｰﾝｼｽﾃﾑ研究会定例会日誌

2005年 8 月 13 日(土)

ランドマーク１３階、フォーラムよこはま

･出席者：中島先生、畑、田中（肇)、松本、石井、荒井、佐久間、木下、岡崎、北野、越後、鈴木、橘田、古谷津、鷲尾

･作品持参者：木下、北野、松本、橘田、石井、荒井、鈴木、岡崎、越後、畑

・以下写真展関連事項
  ・写真展額装予定日・・・１０月１５日予定（予備日１０月２２日）
  ・作品セレニウム調色時は、完全に水洗してから行うこと。
  ・スポッティングのむずかしいところは自分で行わない。（額装時、先生のアドバイスにより行う。）
  ・プリントの際、マルチグレードフィルター交換時、ぶれないよう注意すること。
・次回 USA ツアー報告会を行う
・来年５－６月頃中島先生台湾にて写真展開催予定。（TIVAC ギャラリー）

2005年 9 月 10 日(土)

横浜市民活動支援センター(4F 会議室)

・出席者：中島先生、畑、田中（肇)、松本、石井、荒井、佐久間、木下、岡崎、北野、越後、鈴木、橘田、古谷津、浜野、宮岡、菅野、古川、小野、佐野、長谷川

(会員以外：吉田氏、川辺氏)

・作品持参者：木下、北野、橘田、石井、鈴木、岡崎、越後、畑、小野、古川、長谷川、浜野、菅野、田中（肇)、古谷津、宮岡

・以下京都イシス写真展関連事項
  ・京都イシス写真展日程変更(11/2-11/13)
    （ただし 11/7,11/8 は予約開廊日なので予約しないと開廊しないので注意）
  ・搬入(10/30)（ギャラリーに全てお願いする）
    搬出(11/13)（会員も立ち会う）
  ・11/5 レクチャー(2 時間前後)／パーティ
    内容はゾーンシステムに関する講演(中島先生)と写真ｺﾚｸｼｮﾝに関する講演（荒井）
  ・点数は３５点くらいに絞る。
  ・DM はイシスへお願い済み。
  ・10/15 額装（田中英司氏アトリエにて）
・以下東京シリウス写真展関連事項
  ・広報用写真６人にお願い済み
  （６人ｘ１２枚）・・・9/21 中島先生着
  ・DM をイシスにお願いしてみる。
    （安く質が良いので）
・アダムス暗室見学ツアーライドショーを行った。
  （ツアーを企画してくれた吉田氏も参加）
・ガラスネガキャリアのニュートンリング防止用に「アトラスパウダー」が良いとの情報あり。
  （元々はフィルムスキャニング用、銀一にて販売）

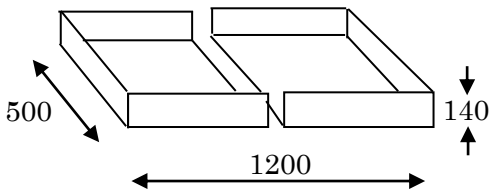
Information

【売ります】

中島秀雄

・ニッコール 210mmF5.6　AB+　・・・35000 円

・塩ビ製組み立て流し　・・・15000 円



【原稿募集】

会員の皆様からの原稿をお待ちしています。

［以下原稿投稿に関するお願い項目です。すみませんがよろしくお願いします。］

1．写真原稿は、紛失事故防止のためできるだけネガやポジは避け、プリントでお願いします。

2．手書き文章はスキャナーでパソコンへ入力できないので、原則として受け付けません。以下いずれかの方法にて投稿願います。
- ワープロやパソコンでプリントアウトしたもの、（スキャナーでパソコンへ入力します。）
- パソコンの電子メール
- ウィンドウズの Word2000
- text ファイル

（ちなみにこの会報は、ウィンドウズの Word2000 で作成しています。）

ただし、どうしても手書き文章しか投稿できない事情がある場合は、事前に連絡をいただくようお願いします。

3．イラストは手書きでも結構です。スキャナーで取り込みます。

パソコンの扱いが不慣れのため、時々ご迷惑をおかけするときがあるかと思いますので、その際はよろしく御指導ください。

［編集部］

荒井　崇